

7月23日の朝、雪溪淵にあるシュルンドとクレバスに気をつけながら旧道に出て仙人温泉小屋へたどり着いた。朝7時くらいだったと思う。この頃の仙人温泉小屋は露天風呂のある宿泊棟前に登山道が続いていた。初めて見る露天風呂は無色透明の綺麗なお湯が満たしてあった。

飛び込みたい衝動を抑えて

入り口から大きな声で「すいませーん」

「お風呂入らせて下さ〜い」

手拭い鉢巻を締めた親父さんがニコニコしながら出て来て下さった。

「なんだっ！早いなっ！入って良いよ。」

高橋さんと初めて交わした会話だった。

黒部の深い溪谷を延々と歩いて仙人谷雪溪にたどり着きビバークしてやっと到着した仙人温泉小屋

この快適な露天風呂には感動してしまった。

当時の露天風呂は横にビールを冷やした木箱が設置してあり。思わずビールに手が伸びて一気に飲みしてしまった。

風呂を出てから空き缶を持って行き

「すいませ〜んビール飲んじゃいましたお金払います。」

「いくらでも飲んで良いよ。風呂で飲むビールはうまいだろう！」とニコニコと話す高橋さん、

調子に乗って2本目を飲み干した。

疲れた体に朝からのビールは本当にうまかった

親不知から、この日で丁度一週間が経ち雨の中を歩いて来て疲労も溜まっている。

洗濯もしたい。日程は遅れているが今日はここで一泊して休ませてもらおう。

この時点で剣岳登頂は諦めた。

「えっ？泊まるって？？？まだ朝の8時じゃないか....まだまだ行けるよ..頑張りなよ。」

訳を話すと

「そうか、だったらゆっくりしていけば良いよ。」

洗濯用の大きなたらいと洗剤、髭剃りを持って来て下さった。

その日は洗濯をしてから露天風呂に入ってはビールを飲んで昼寝をしたりして一日中ボーっとしていた。

その時は仙人温泉小屋を、高橋さんがたった一人で切り盛りしている事など想像もできなかった。

見えないスタッフと共に秘境温泉の小屋を支えているのだろうか、温泉付きの山小屋なんかで働けるなんてきっと快適なんだろうと、調子の良いことばかりを考えていた。

露天風呂が対岸の源泉から傾斜が厳しい仙人谷をまたぎ、パイプでお湯を引いて来ていること

極めて危険な厳しい作業により温泉が支えられていることなどは知る由も無い

結局その日は宿泊者は自分一人のみでゆっくりとくつろげた。その夜は山菜の天ぷらとイワナの甘露煮が美味しかったのをよく覚えている。それまで入山してからインスタント中心の食事だったので久しぶりのご飯はお茶碗山盛り 5 杯くらいは食べたであろう。焼酎を御馳走になりながら今年から仙人温泉小屋を始めたことなどを話して下さった。



当時の露天風呂



当時の露天風呂前デッキ



小屋のオーナーになることに対して周りの知人から親戚まで反対された事など、自分は会社を首になり日本海から太平洋側まで歩いている事なども話した。たわい無い話でもあったが、親不知から丁度一週間歩き続けてから初めてくつろぎながら酒を飲み話すことが心地よかった。一人梅雨空の下を歩いて来て心身共にかかなり疲れていたのだと思う。周りから反対されながらも歯を食いしばり一人で小屋を始めた高橋さんと酒を酌み交わし話を聞いていると元気も出て来た。今思うと自分と何処か求めているものが合致していた所があったのかもしれない。会社勤めしか経験の無い自分にとっては、秘境に位置する山小屋を一人でやり抜くと言う高橋さんに憧れも少しはあったと思う。この時の高橋さんには何が何でもやり抜くんだと言う決意が話の中の節々に感じられていた。20時半消灯後、寝る前に露天風呂へ一人入らせて貰った。雲も無く星空が綺麗な夜だった。親不知から一週間歩いて来て初めての綺麗な星空だった事を覚えている。黒部の山の中を歩き続けて来て、暗闇の中を一人入っている露天風呂が不思議な感覚だった。この時、仙人温泉小屋へは、また必ず来ようと思った

翌朝（7/24日）は4時半に起床すると快晴だった。後からの情報では、この日がこの年の梅雨明けだったらしい。仙人温泉小屋を5時に発つ時、高橋さんが笑顔で見送って下さった。名刺を渡され「ゴールしたら必ず連絡するんだぞ！」スタートしてから一貫して朝飯は歩きながら携帯食料と決めていた。毎朝4時に起床して5時に発つと言うのも体が慣れてきたのか仙人温泉小屋を境にして快調な毎日です。実に楽しい登山を満喫させて貰った。北アルプスの3000m峰、立山、槍ヶ岳、大喰岳、中岳、南岳、北穂高岳、洞沢岳、奥穂高岳、前穂高岳9座は天気良く難無く登頂した。7/30日に上高地へ到着。体重はスタートの2週間前と比べて体重は7kgも減っていた。その後は焼岳を経て乗鞍岳、御嶽山、木曾駒ヶ岳、オートキャンプ場などでもテントを張らせて貰った。



槍ヶ岳をバックに大喰岳（3101m）

真夏の炎天下のアスファルト道路の行程が一番きつかった。
しかし、下界は山と違って遭難する心配は無い、
橋の下とか木陰を見つけては休憩をした。
色々な人の出会いがあり親切にして貰った。
道路を歩いていると良く車が止まって声を掛けて下さった。
「駅まで乗せてってあげますよ」
「登山口まで大変だろう。乗りなよ」
丁重に断ったのは言うまでもない
82歳の御婆ちゃんが一人切り盛りする小屋では
到着するなり洗濯をして貰った。
朝早くの出発には畑で取れたばかりのキュウリとトマトと
味噌を持たせて下さった。
南アルプスの仙丈ヶ岳、北岳、間ノ岳、農鳥岳、塩見岳、
荒川中岳、悪沢岳、赤石岳、聖岳
ここまでの3000m峰20座を登頂、

最後の3000m峰富士山までは若干天気が悪かったが頂上は
快晴の天気で登れた。

この年は台風の上陸が無かったことも幸いした。
富士山剣ヶ峰を登頂する8/21日は朝4時から五合目の
佐藤小屋から出発した。スタート当初は予定よりも
遅れ気味だったが、目標としていた自身が44歳となる
誕生日前後に富士山剣ヶ峰に到達するというプランは
ほぼ達成できた。この時の富士山登頂はお盆過ぎと
言うこともあって登山者も少ない方だと言うことだったが
日本海から歩いて来た中で一番賑やかな蟻の行列となった
登山である。

あつけなく登頂して遠く白馬岳がはっきりと見えた。
4週間前に登頂した自分が歩いて来た山々を見て
感慨深いものもあったが、最後の3000m峰、国内最高峰を登って
感動と言うものは、それほど沸いてこなかった。
その時は仙人温泉小屋を境にして快調に歩いて来て楽しかった
登山が、もう少しで終了してしまうと言う事の残念さの方が
大きかったのだと思う。
そこから2日後にゴールの田子の浦海岸に到着して
プランは終了した。38日間担いでいたリュックの重量は
富士宮のビジネスホテルへ泊まった時に重量を計ると
約23kgに減っていた。途中で破れた雨具やシャツ、
予備のガスカートリッジ等を処分、南アルプス下山後は
大量の食料を持つ必要も無くなり軽くなっていたのだ。
スタート時には31.6kgもあったのだが、スタートしてから



御嶽山 (3063m)



北岳 (3163m)



富士山剣ヶ峰 (3776m)

約1週間でそれ程にも苦にはならなかった。

山城を歩いている時は毎朝4時に起床して5時には歩いていたのだが、目的地に14時から15時に着くまでリュックを下ろさないこともざらにあった。

今では考えられないのだが、その時には重たいリュックが体の一部になっていたのではないと思う。

人生の転機となった本州を横断した登山はその後の人生に影響を与えたのには違いない

その後下山してからは予想通り中々再就職は決まらなかったが自身の経験を生かせる会社に拾って貰った大手メーカーを相手にした事業の展開で海外勤務を1年近く経験させて貰った。

解雇された当時は会社勤めなど半分諦めてたいたのだが、高橋さんが酒を酌み交わした時に話されていた「健全な心と健康な体さえあれば何とかなるもんだよ」

言われていたその通りに何とかなった。

その後は忙しくて仙人温泉小屋へ行く時間と機会が中々訪れなかった

切欠は、やはり2005年の某山系雑誌に「みやあらくもんの夢語り」仙人温泉小屋の高橋さんのエッセーを読んだ時だったその年の8月中頃に仙人温泉小屋へ2泊させてもらった

高橋さんは、はっきりと覚えて下さった。

樺平から7時間歩いて到着した露天風呂は初めて来た時と同じように感動した。

しかし、本格的にお手伝いをさせて貰うようになったのは、その3年後の雲切新道が開通してからであった。

長期の海外勤務から帰国した2007年の久しぶりの登山が、その年に開通した雲切新道であったのである。

その時に高橋さんから「来年の小屋開けにもし良ければおいでよ」と声を掛けて下さった。

それから今現在にお手伝いは続いている。

仙人温泉小屋のお手伝いを始めた頃は想像していた以上に作業は過酷であった。

どこの山小屋も大変である事には違いないと思うのだが

高橋さんの凄い所は多人数でも躊躇してしまう作業を時間を掛けてでも一人でこなしてしまう

最初の3年は全ての作業をたった一人で乗り切った。

当時、県外からやって来た新しいオーナーの高橋さんは

地元の山小屋関係者には3年持たないだろうと言われていたらしい

地元の人達も認めるほどに仙人温泉小屋の経営は大変なのである。

いずれ尻尾を巻いて小屋から逃げて行くだろうと言う予想に反して14年も高橋さんは頑張った。

お手伝いをしていると資金面でも大変なのが良く分かる。

ほとんどが赤字経営なのだが

高橋さんは我々スタッフにはどんなに苦しい時があっても一切愚痴を言ったことがない

売り上げが駄目だった年は、それを補うためにオフシーズンにより働かなければ

次のシーズンの仙人温泉小屋の経営は成り立たない

職人技術を極めた高橋さんだからこそ仙人温泉小屋は成り立っているのだと思う。

この14年間で仙人谷には高橋さんの血と汗がたっぷりと染み込んだ。

黒部の山奥秘境の地で命を懸けて来たからこそ14年も続けて来てこれなのだと思う。

仙人温泉小屋へ毎年足を運びながら時々思うのだから

首切りされずに仕事を続けた人生とこれまでの人生と、どちらが良かったのであろうか？

一生答えは出ないと思うが、高橋さんとの出会いは人生の師匠との出会いでもあった。

師匠には、これからも10年20年と1年でも長く仙人温泉小屋を続けて頂けるようにお手伝いを頑張りたい
また、仙人温泉小屋へ足を運んでくれる登山者が少しでも増えること、一人でも多く仙人温泉小屋に来て感動して頂き
たいと願っている。

それと、同じような志を持ったオーナーが現れ、引き継いでくれることも願っている。
もちろん新しいオーナーが現れた時には体力続く限り協力させて貰いたい
それが自身に与えられた使命だと思う。